

新 除 草 剤

ペアサイド粒剤

PCP・MCP除草剤

(取扱会社)

ペアサイド普及会

武田薬品工業株式会社
中外製薬株式会社
八洲化学工業株式会社
日本カーバイド工業株式会社
(事務局)

性状・使用特性：本剤の主成分は、ペンタクロルフエノールカルシウム複塩二水化物（PCP-Ca）30%と、2・クロル・4・クロルフエノキシ酢酸カルシウム（MCP-Ca）1%の混合粒剤である。

PCPカルシウム、MCPカルシウムともにその作用はよく知られている通り、前者はノビエ・カヤツリグサ等水田初期雑草に有効な接触除草剤であり、後者はマツバイなどの多年生雑草やコナギ・ヒロムシロなど広葉雑草及びある程度生育の進んだ幼少雑草に対し、根・莖葉から吸収されて殺草効果を示すホルモン型除草剤である。本剤は、この両者を合理的に配合することにより、相乗効果を得、全雑草特に広葉雑草及びマツバイに卓効を示し、効力の持続期間もPCP-Na単剤の2倍程度に長くなり、水田の初期～中期にわたって使用できる。また、土壌中の移動程度も、PCP-Na単剤の2倍程度である。

水稻に対する薬害については、極端な漏水田を除いては殆んど認められず、特に本剤は独特のカルシウム複塩粒剤になつているため、徐々に有効成分を溶出するので、効果の持続と薬害を軽減化させるという安全・効果的な土壌処理

剤である。

魚毒性は、コイで48時間TLMが0.253ppmと、PCP-Naよりは低いが強いのので注意する。

使用方法：普通期及び早期栽培の活着後（移植後4～7日）及び中耕後湛水土壌処理用として、10アール当り製品3kgを均一に散布する。

魚貝類に対する使用上の注意は、PCPに準じ、かけ流しや漏水の激しい水田での使用は避ける。

本剤は、必ず湛水状態（水深3～5cm）で使用する。いつたん水底に落下し、有効成分を溶出させ、土壌表層部に処理層を形成して効果を示すので、散布後1昼夜ぐらひは田の水の移動を行なわないようにする。

適用土壌は埴土～壤土で、日減水深2～3cm以下のところで使用する。また、田植え前や直後の使用をさけると共に、寒冷地の早植え地帯などで気象条件が悪く、生育抑制の心配があるところでは、薬量を少なくするか、中耕後に使用する。

エビデン

DMP粒剤

(取扱会社)

兼商株式会社

性状・作用特性：本剤の主成分は、2・6・ジクロルベンゾニトリル（DBN）と、2・メチル・4・クロルフエノキシ酢酸エチルエステル（MCPB）及びペンタクロールナトリウム一水化物（PCP）の3成分混合剤である。製品には、3成分合計14.64%で適用地帯を全国とする「エビデン粒剤」と、成分合計18.7

新 除 草 剤

%で東北・北海道のノビエ優占地帯を対象とする「エビデン粒剤18.7」がある。

本剤は、非ホルモン型移行型で、マツバイに特異的な作用性のあるDBNの単用によつて生ずる水稻への薬害を回避するために、安全な使用量にして、不足する除草力をホルモン型のMCPBの協力作用によつて補ない、かつノビエに対しては接触型のPCPとDBNの協力作用を、1年生雑草に対してはMCPBとDBNの相乗作用を利用するという、水田雑草の防除に必要なして充分な配合をしたものである。

使用が極めて不適当な場合には、水稻に薬害を生ずる。その症状は、土壌的要因の場合にはDBN特有の出すくみ・心枯れ・ぜい弱化がみられ、低温の場合にはホルモン型特有のロール葉・株開張が現われる。

魚貝類に対しては、毒性があるので、使用地域および排水の時期などについてはPCP除草剤に準ずる。

使用方法：田植後7～10日の活着後に、3～5センチ湛水のまま、10アール当り2.5～3キログラムを全面に均一に散布する。使用水田の条件としては腐植に富む埴土～壤土で1日の縦浸透量2センチ以下（洪積土では4～5センチ以下、沖積土では0.5センチ以下）とする。高寒冷地での使用はしない。

アクチノール

Ioxynil乳剤

（取扱会社）

シオノギ製薬株式会社

イーライ・リリー・インターナショナル・
コーポレーション

性状・作用特性：本剤は、1964年以来M

&B8878Eの試験名で試験を実施してきた除草剤で、本年度春播小麦地帯で実用化が認められた。その主成分は、8・5・ジヨード・4・オクタノイルオキシベンゾニトリル（一般名アイオキシニルオクタノエート）で、剤型は30%乳剤である。

本剤の作用特性は、広葉一年生雑草に強い殺草力を示す非ホルモン型接触型除草剤で、呼吸阻害及び光合成の阻害によつて雑草を枯死させる。雑草種類に対する選択性は、広葉一年生雑草に大、イネ科・カヤツリグサ科雑草に小の選択性を有し、特に秋発生雑草一東北部のハコベ、関東北部のノミノフスマ・ノボロギク、四国のヤエムグラ・タネツケバナ、九州のニワヤナギ・ヤエムグラなど一の生育初期処理に顕著な殺草効果を示す。しかし、イネ科雑草とツユクサ等には効果が劣る。

土壌中の残効期間は2～10日と短く、移動性は極少～少と安全である。また、温度による効果の変動はなく、安定している。

小麦に対する薬害については、小麦の2～4葉期処理では殆んど認められないが、温暖地では軽い葉先枯れが出ることもある。

人畜毒性は、マウス径口LD50が205mg/Kg、径皮LD50が1,240mg/Kgであるが、魚毒性は稚コイで48時間TLMが0.32ppmと農薬分類上「C類」に相当するので、使用に当つては薬液が河川等に飛散流入しないよう特に注意する。しかし、実用薬量による魚毒性はPCPの約20分の1程度である。

使用方法：春播小麦畑の火山灰土地帯を対象として広葉雑草の発生揃期から2～6葉期までの時期に10アール当り製品120～1600